

I. 事業概要

① 概要	2
② 実施状況	4
③ 女性研究者の属性	5

II. 調査結果

① ライフステージから見た特徴	8
(1) 独身／夫婦期	8
(2) 子育て期	13
(3) 中高年期	21
② キャリアステージから見た特徴	24
(1) 着任したばかりの教員の場合	24
(2) 研究員・任期付教員の場合	24
(3) 管理職・上位職階級の場合	25
③ 教育・研究・業務・職場環境とストレス	26
(1) 教育面	26
(2) 業務面	26
(3) 研究面	27
(4) 職場環境	28
(5) ストレスを感じる事柄とその解消方法	28
④ 女性研究者が抱く研究の魅力・やりがい・楽しさ	30
⑤ 女性研究者を支える支援体制や各種男女共同参画推進事業への要望	34
(1) 男女共同参画の推進	34
(2) 研究継続支援員制度	35
(3) 巡回聞き取り相談制度	36
(4) メンター制度	37
(5) 託児サポーター制度	37
(6) その他の支援制度	38

III. 調査結果のまとめと課題

IV. 巡回相談を振り返って

資料	49
あとがき	55

I. 事業概要

◎work◎life◎
balance innovation

1 | 概要

巡回聞き取り相談事業は、相談員が定期的に巡回することで、問題の早期発見・早期対応が可能となると同時に、複数のキャンパスに共通する問題状況を把握できるというメリットがあるため、山形大学独自の事業としてスタートした事業である。本事業では、巡回相談員が各キャンパスを巡回し、女性研究者の研究と生活の現状を把握するとともに、ワークライフバランスの取れた研究・生活を送る上での問題や障壁を汲み上げ、集積したデータを分析し、大学の取り組むべき課題として解決方策を探ることを目的に、平成21年度～平成23年度の3年間に渡って「巡回聞き取り相談」事業を展開してきた。

本事業の対象者は、本学に在籍する女性研究者（教員と博士課程の大学院生、研究員）である。平成21年度より非常勤の相談員を3名配置し、毎年1回、全女性研究者へ「巡回聞き取り相談へのご協力をお願い」を発送し、協力を得られた研究者に対して、巡回聞き取り相談を実施してきた。


聞き取り内容は、研究・キャリア面での相談、育児・介護相談、健康、将来への不安、どこにも相談できなかった不安等、主にワークライフバランス面での相談、及びキャリア面に特化して行うものの、聞き取り項目を厳密に設定せず、聞き取りの糸口として、「お困り事はありますか」という質問を行い、そこから派生する内容についての聞き取りを行った。また、本事業の目的の1つが、女性研究者支援事業を利用者ニーズに合致させることとしているため、女性研究者支援事業へのニーズについての質問を併せて行っている。

尚、本事業は「相談」であると共に質的調査を兼ねているため、回答者には、聞き取った内容で差し支えなければ質的調査としてデータを用いたい旨を事前に知らせている。

相談後の対応については、必要に応じて、当人の意思確認を行った上で関係部局へ繋ぐ、関係する情報を提供する等の対応を行うと共に、女性研究者支援事業にすぐに活用することができる事柄に関しては、支援事業の制度設計に反映する等の対応を行った。更に、対応した事柄の一部については、男女共同参画推進室のホームページにも掲載している。（参考資料P.3）

本事業の日程伺い方法は、教員の場合、直接、協力依頼文書と日程伺い用紙を返信用封筒を同封して送付し、事前に都合のよい日を把握した上で、主にメールにて日程調整を行った。大学院生の場合、協力依頼文書等の書類を、各学部の学務チームを通して配布した上で、日程調整を行った。（資料1、2、3）

巡回聞き取り相談と並行して、来室相談及びメールや電話での相談を随時受け付けている。すなわち、男女共同参画推進室が、主に女性教職員の抱える問題の解決窓口として機能するよう働きかけている。



山形大学
YAMAGATA UNIVERSITY

男女共同参画推進室
Office for Gender Equality, Yamagata University

HOME
お問い合わせ
お問い合わせ
お問い合わせ
ENGLISH

調査室について

イベント

主要取組

主要取組


主要取組

Home > 主な取組 > 巡回相談

巡回相談

平成21年11月～平成22年2月の期間に、本室が巡回聞き取り相談を行いました。その結果以下のよう50名の方からお問い合わせがありました。

- ◆ 女性研究者の声より
 - 01: トイレにオムツ交換台があるといいですか？
 - A: 平成21年1月に小田山キャンパスが図書館のトイレにオムツ交換台が設置されました。ありがとうございます。
 - 02: 女性研究者が文庫でもらえる匿名相談の冊子が欲しい。
 - A: 匿名相談冊子は、本室が各キャンパス、各学舎などに配布しています。ご希望がございましたら、本室までお問い合わせください。また、匿名相談冊子では、性別、年齢などの情報を記入していません。ご心配なくご活用ください。お問い合わせ先は、
 - 03: 大人数に女性研究者が少ないと考えるのですか？
 - A: 山形大学の女性教員数は2009年10月1日です。2010年までに国立大学協会が公表している数値よりも、その数は増加傾向にありますが、山形大学でも、男性共同学部長が中心になって2018年までに15名を目標としています。
- ◆ 研究について
 - 04: 子育てしながらの研究が難しい。
 - A: 山形大学では、子育てしながらの研究が難しいという声が多くあります。育児と研究を両立させるには、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。
 - 05: 子育てしながらの研究が難しい。
 - A: 山形大学では、子育てしながらの研究が難しいという声が多くあります。育児と研究を両立させるには、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。
- ◆ WLB (ワークライフ・バランス) について
 - 06: 子育てしながらの研究が難しい。
 - A: 山形大学では、子育てしながらの研究が難しいという声が多くあります。育児と研究を両立させるには、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。
 - 07: 子育てしながらの研究が難しい。
 - A: 山形大学では、子育てしながらの研究が難しいという声が多くあります。育児と研究を両立させるには、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。
 - 08: 子育てしながらの研究が難しい。
 - A: 山形大学では、子育てしながらの研究が難しいという声が多くあります。育児と研究を両立させるには、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。
- ◆ 問い合わせ
 - 山形大学男女共同参画推進室
 - T: 090-8560 山形市小田山11-1
 - 電話: 023-628-4837/4838/4839 FAX: 023-628-4014
 - Mail: gender@yagyu.ac.jp



山形大学
YAMAGATA UNIVERSITY

男女共同参画推進室
Office for Gender Equality, Yamagata University

HOME
お問い合わせ
お問い合わせ
お問い合わせ
ENGLISH

調査室について

イベント

主要取組

主要取組

主要取組

Home > 主な取組 > 巡回相談

巡回相談

ただ今、21年度巡回聞き取り相談を行っています。関係者様より、女性研究者の皆さまにメールまたはお電話にて、巡回聞き取り相談へのご参加をお願いをしています。お問い合わせ: 電話番号: 023-628-4838 Mail: gender@yagyu.ac.jp

平成21年11月～平成22年2月の期間に、女性研究者に「巡回聞き取り相談」を行いました。その結果以下のよう50名の方からお問い合わせがありました。

- ◆ 女性研究者の声より
 - 01: トイレにオムツ交換台があるといいですか？
 - A: トイレにオムツ交換台があるといいですが...
 - 02: 子育てしながらの研究が難しい。
 - A: 子育てしながらの研究が難しいという声が多くあります。育児と研究を両立させるには、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。
 - 03: 大人数に女性研究者が少ないと考えるのですか？
 - A: 山形大学の女性教員数は2009年10月1日です。2010年までに国立大学協会が公表している数値よりも、その数は増加傾向にありますが、山形大学でも、男性共同学部長が中心になって2018年までに15名を目標としています。
- ◆ 研究について
 - 04: 子育てしながらの研究が難しい。
 - A: 山形大学では、子育てしながらの研究が難しいという声が多くあります。育児と研究を両立させるには、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。
 - 05: 子育てしながらの研究が難しい。
 - A: 山形大学では、子育てしながらの研究が難しいという声が多くあります。育児と研究を両立させるには、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。
- ◆ WLB (ワークライフ・バランス) について
 - 06: 子育てしながらの研究が難しい。
 - A: 山形大学では、子育てしながらの研究が難しいという声が多くあります。育児と研究を両立させるには、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。
 - 07: 子育てしながらの研究が難しい。
 - A: 山形大学では、子育てしながらの研究が難しいという声が多くあります。育児と研究を両立させるには、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。
 - 08: 子育てしながらの研究が難しい。
 - A: 山形大学では、子育てしながらの研究が難しいという声が多くあります。育児と研究を両立させるには、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。また、育児と研究の両方をサポートする体制を整えることが重要です。
- ◆ 問い合わせ
 - 山形大学男女共同参画推進室
 - T: 090-8560 山形市小田山11-1
 - 電話: 023-628-4837/4838/4839 FAX: 023-628-4014
 - Mail: gender@yagyu.ac.jp

聞き取り相談を実践するにあたっては、インタビューガイド（資料4）を作成し、相談員研修を毎年実施し、相談の質の向上に努めてきた。また本事業への協力の任意性についても明示すべく、男女共同参画推進室長名で発行した協力依頼の他に、巡回相談担当者からの協力依頼（資料5）を発行し、協力の任意性についての説明を行った上で、対象者への協力依頼を行っている。

聞き取り内容の重複を避けるため、且つ、相談者との信頼関係を高めるため、聞き取りをする相談員については、昨年度と同じ相談員が聞き取りに赴くよう配慮した。また、個人情報保護の面から聞き取り情報の管理を徹底し、本事業で得られたデータは、男女共同参画推進のための基礎資料として使用するが、内容等が公表される際には、絶対に個人が特定されないように情報管理の徹底を図っている。

② | 実施状況

巡回聞き取り相談事業の実施状況（聞き取り相談率）は、平成21年度は59%、平成22年度27%、平成23年度23%である。本事業を開始した平成21年度が最も高い「聞き取り相談率」となったが、その翌年以降も女性研究者の2割以上から、本事業への協力が得られた。

学部別の実施状況では、特に差異は見られないものの、年々、聞き取り率が低下しているため、本事業への協力と理解を得られるようなしくみ作りが急務である。

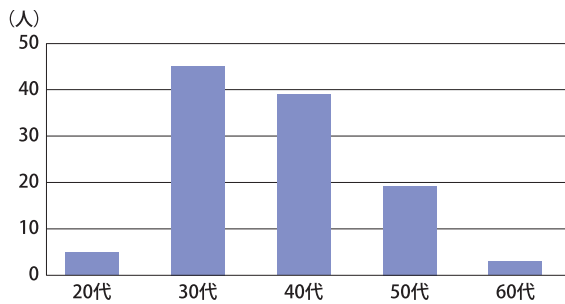
教員と大学院生への相談率を比較すると、大学院生等との聞き取り相談率は低い状態が続いている。大学院生の場合、個人の研究室を持たないため、直接コンタクトを取りにくい状況にある。巡回聞き取り相談事業自体を知らない大学院生も少なからずいるため、今後は、本事業の周知を徹底し、大学院生との相談率を上げるための対策を講じる必要がある。

		平成21年度			平成22年度			平成23年度		
		対象者数	聞き取り数	聞き取り率	対象者数	聞き取り数	聞き取り率	対象者数	聞き取り数	聞き取り率
教員	人文学部	12	8	67%	12	6	50%	12	5	42%
	地域教育文化学部	15	9	60%	15	8	53%	13	6	46%
	理学部	3	2	67%	4	2	50%	3	3	100%
	医学部・附属病院	61	42	69%	67	15	22%	115	19	17%
	工学部	6	6	100%	6	6	100%	6	0	0%
	農学部	4	4	100%	7	6	86%	6	5	83%
	基盤教育院他	8	5	63%	6	4	67%	8	4	50%
大学院生等	理工学研究科	16	8	50%	16	1	6%	12	1	8%
	医学研究科	31	8	26%	43	0	0%	29	4	14%
	合計	156	92	59%	176	48	27%	204	47	23%

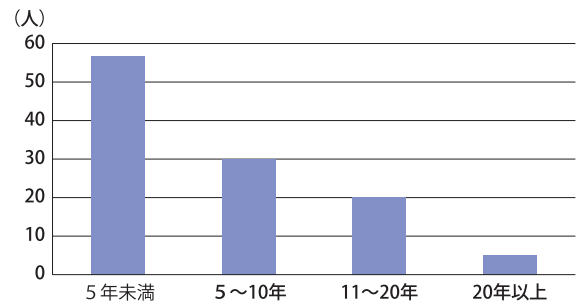
③ 女性研究者の属性

本事業の対象者となっているのが女性研究者であるが、平成23年10月現在のデータによると、本学の女性研究者（大学院生を除く）の多くを30歳代～40歳代が占めており、比較的若い世代の女性研究者が多数を占めていることがわかる。在職年数についても5年未満の研究者が最も多くなっている。職階級別に見ると、助教が全体の半数を占めており、女性研究者の多くが助教のポストにいることがわかる。

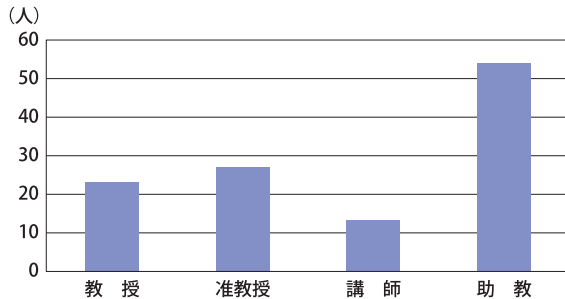
年代別女性研究者



女性研究者の在職年数



職階級別女性研究者数



Ⅱ. 調査結果

©work©life©
balance innovation

本報告書では、巡回聞き取り相談によって得られた言説についてコーディングを行った上で、(1) ライフステージ、家族関係から見た特徴、(2) キャリアステージから見た特徴、(3) 教育・研究・業務・職場環境から見た特徴、(4) 女性研究者が抱く研究の魅力・やりがい・楽しさ、(5) 男女共同参画事業と女性研究者を支える支援体制の4つの側面から分類し、本学の女性研究者の特徴と女性研究者の抱える問題点について分析を行っている。

分析にあたっては、聞き取り調査データとして記録した語りを文節に分け、インデックスコードを付けた後、インデックスを見直し、その上で、インデックス同士の関連のある項目について並べ直し、KJ法を用いて女性研究者の抱える問題やワークライフバランスの特徴を、上記の4つの事柄に集約した。尚、多量のデータの分析を進める上では、質的データ分析用のソフトウェアMAXqdaを使用しながらデータ処理に当たっている。

本調査の対象となっている女性研究者の特徴を、キャリアステージごとに見てみると、①大学への就職を控えている、もしくは山形大学へ就職したばかりであり、且つキャリアアップを目指して研究成果を発表していかねばならない段階。②大学に就職し中堅どころとして職場での役割も高まり、且つ研究にも精力的に取り組まねばならない段階。そして、③学部での位置づけが定着し、学部の運営や研究者としての活動に精力的に取り組む段階に分けることができる。それを職階級で表すなら、①大学院生・研究員・助教、②助教、講師、准教授、③准教授、教授に当てはまるだろう。

ライフステージから見ると、概ね、①結婚や出産を意識し始めた独身段階、もしくは既婚の場合であっても夫婦のみで生活を営み、出産について強く意識し始める時期、②子供が生まれ、子育てに多くの時間を割かねばならない子育て期、③子育てが一段落し、自身の健康や親の介護問題が迫ってくる中高年期の3つに分類することができる。

キャリアステージとライフステージは、必ずしも一致するものではないが、本報告書の結果を先取りするなら、大学院生・研究員・助教の時期が独身・夫婦のみ世帯の時期と重なり、助教・講師・准教授の時期が子育て期と重なり、准教授・教授期には中高年期と重なる。そして、それぞれのステージごとに抱える特徴や問題が異なっていることが見えてくる。次節以降では、研究者のキャリアステージとライフステージによって抱える課題の差異に留意しながら、分析作業を行っていく。

【キャリアステージとライフステージとの関係】

	ライフステージ	キャリアステージ
独身／夫婦期	<ul style="list-style-type: none"> ・未婚、既婚（夫婦のみ） ・結婚・妊娠・出産を意識する時期 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学院生、研究員、助教等 ・就職活動中、就職して間が無い時期 ・キャリアアップを目指して研究成果が求められる
子育て期	<ul style="list-style-type: none"> ・既婚 ・子育てに多くの時間を割かねばならない時期 	<ul style="list-style-type: none"> ・助教、講師、准教授等 ・職場での役割の高まり、中堅どころとして、教育・研究活動に従事する ・キャリアの確立のために、研究成果が求められる
中高年期	<ul style="list-style-type: none"> ・既婚、子育てが一段落 ・介護中、あるいは介護が目前に 	<ul style="list-style-type: none"> ・准教授、教授等、管理職 ・職場での役割が一層高まる ・大学内外における役割が増加し、それに見合ったキャリア形成が求められる

III. 調査結果のまとめと課題：今後の男女共同参画推進事業の展開に向けて

◎work◎life◎
balance innovation

巡回聞き取り相談事業を通して得られた女性研究者の言説をもとに、山形大学に在籍する女性研究者が、仕事や生活を送る上で抱える悩みや問題点を分析してきた。本章では、これまでの分析結果をまとめた上で、今後の本学の男女共同参画推進事業が進むべき方向性について検討する。

【1】「ライフステージ」から見た女性研究者支援

女性研究者の言説の中で、最も多く触れられていたのが、自身のライフイベントに関する事柄であった。**【独身／夫婦期】**の比較的若い研究者からは、「結婚について考えつつも、忙しさのあまり相手を探す時間も取れず、尚且つ、自身のキャリアが確立していないため、結婚を諦めている」との語りが見られた。常勤のポストを得ている場合でも、「その後のキャリア形成に支障が出るのではないか」との不安や、「現在の職場環境を考えると家庭生活を送ることが難しい」との言説が見られた。妊娠・出産についても、「公的な育児サポートの少なさ」、「育児を協力してくれる両親が近くにいない」等、「子どもを育てるサポートが得られないのではないかと不安ゆえに、子どもを産み育てることへ踏み切ることができない」ことを占める声が多かった。また、「ロールモデルの欠如や周囲の理解が得られるかどうか」等の不安を示す語りが多々見られる。

このような、将来のライフイベントとしての「結婚・出産・育児への不安」を解消するためには、育児中の研究者を支援する施策の正確な情報を提示すると共に、結婚・出産を考えている女性研究者へ、「周囲はそれを理解している」というさりげないメッセージや雰囲気構築していくことが必要である。もちろん、結婚・出産・育児がプライベートなデリケートな問題であるゆえに、その施策には最大限の注意を払って進めていくことが重要である。

【子育て期】にある研究者は、現在子育ての真っ最中である。彼女たちの語りからは、「子どもを産めることのできる年齢は限られているので、産める時に産むべき」ではあるものの、「二人目の出産は難しい」「もう一度産休を取って休むことに躊躇する」等、第二子の出産を躊躇している姿が浮かび上がってくる。そして、育休を取得することによって、「キャリアが中断してしまう」、「育休明けの仕事への不安を感じている」ことがわかる。

「子育て」についても様々な語りが見られた。子育て中は自分の体力の面でも周囲との関係においても大変な時期にあり、多くの女性研究者が、子育てが研究活動に大きな影響を与えていることを述べている。その語りの中には、夜遅くまで思う存分研究活動を行っていた独身期の時間の使い方と比較し、その頃のように研究活動を行うことのできないジレンマ、そして研究業績が少ないことによる「研究者としての評価」への影響に不安を感じていることがわかる。

研究活動への不安と共に、仕事を続けるために、「子育てそのものへの不安」も大きい。「子どもが病気になった時、保育施設に預けられない上に、子どもを見てくれる人も身近におらず、仕事の

やりくりがとても大変だった」と訴える語りが多く見られた。子どもを預ける保育場所の確保にも苦慮しており、「大学内の保育所に預けることができるとありがたい」と、大学内保育所の設置の充実を求める声が見られる。

子育て中の研究者が特に気にしているのが、「周囲の理解が得られるかどうか」についてである。子育て中は、特に周囲に気を使いながら、周囲の理解を得ようと努力する姿が見られる。職場の理解が得られた研究者からは、「(気持ち的に) 楽になった」との声があった一方で、職場の理解に苦勞している女性の場合、「退職を考えている」と、かなり追い詰められた状況に直面している様子が窺える。

本学では「託児サポーター制度」や「研究継続支援員制度」等、子育て期にある研究者の利用できる制度を構築してきたが、このような「子育て期」にある研究者の声をみると、益々、支援制度の充実を図る必要性があることは明らかである。各キャンパスでの保育所の設置に加え、子育てが「キャリアの中断」に結びつかないようにして行かねばならない。具体的には、各研究者を「評価」する際の基準の中に、「子育てがキャリアの中断にならない」ことを明言化し、本人や周囲を含め、その意識を浸透させる意識改革キャンペーン等を展開する必要がある。

また、子育て時には、子どもの病気等で、急に仕事を休んだり早退しなくてはならない状況に直面する。そうした急な出来事のために、周囲の人たちが理解を示す雰囲気づくりが必要である。日ごろから、「カバーしあうのはお互いさま」とする雰囲気作りが必要であることは言うまでもないが、それに加え、育児中の研究者が早退勤することで穴をあける業務をカバーする制度を構築することが必要であろう。

子育て時のサポートや周囲の理解が得られた女性研究者からは、「子どもを産んで良かった」と子育ても仕事も充実している語りが見られる。決して「子育て」が退職と結びついてしまうようであってはならない。こうした語りが多く聞かれることになるよう、今後は子育て中の研究者のみならず、子育て中の研究者を抱える部署を含めた支援を視野に入れて、事業を実施していくことが求められる。

中高年期の女性研究者からは、介護についての悩みや不安を示す声が多く見られた。介護を抱えた多くの研究者が被介護者と離れて暮らしており、介護のための移動にお金も時間もかなりの負担を強いられる状況にある。「いつまで続くか先の見えない介護」である上に、「年間5日間の介護休暇の短さ」、「介護中にある研究者の仕事をカバーする人が見つかるかどうかへの不安」、「介護休暇を取得するタイミングも難しい様子」が窺える。更に、「介護によって業績評価が下がってしまうことへの不安感」も高い。

本学の女性研究者の場合、中高年期の研究者の数が少ないため、これまでは「介護を抱える女性研究者」の問題が現出しにくい状況にあった。しかし、今後女性研究者が増加し、研究者の年齢も上に上がるにつれ、「介護」を抱える研究者を支援するニーズは、今後ますます増すものと考えられる。介護においても育児同様、日本社会においては、妻・嫁・娘である女性の負担が大きいこともまた事実であり、研究者であっても、その状況は変わらない。それゆえ、今後は、「介護期」にある研究者が求める支援策のニーズを丁寧に把握すると共に、ニーズに合った施策を提供していく必要がある。更に、育児期と同様に、周囲の理解を得られる雰囲気づくりのため、当事者のみならずそ

の周囲に気を配った支援策を構築していくことが求められる。

【2】「キャリアステージ」から見た女性研究者支援

女性研究者のキャリアの段階によって、個々の研究者の抱える問題や不安は異なり、支援へのニーズは様々であった。着任したばかりの教員の場合、「大学という職場」「山形という環境」に慣れるまでに苦労している語りが見られた。特に、「大学の情報や地域情報の不足」、「相談相手の欠如」は、新任の研究者にとって大きな負担を与えている。このような状況を改善するためにも、男女共同参画推進室から新任者向けの情報を発信すると共に、研究者同士のネットワーク作りを引き続き行っていく必要がある。特に、新任者にターゲットを絞って、研究者同士を繋ぐための事業を展開するのが効果的だろう。

研究員・任期付教員の場合は、「就職先が確保できるかどうか」が大きな不安の要因となっている。先行きの不安感を解消するためのサポートを提供していく必要があるが、その具体的な施策として、先輩研究者との交流会の実施や「キャリア塾」等、若手の研究者がキャリアを形成する上で役立つ各種講習会等を積極的に開催していく必要がある。更に、関係部署と協力しながら、キャリア形成に資する情報をメーリングリスト等で配信するなど、情報の収集と提供に取り組むことも必要である。

管理職・上位職階級教員の抱える悩みとして中心にあるのが、健康についての不安である。中高年期に差し掛かり、「かつてのようにバリバリとは働けない」状況に焦りや不安を感じている言説が見られた。このような心身の状況が思わしくない場合の一番の解決策は、「身体を休めること」である。無理をしてしまうと、更に深刻な状況に繋がる恐れがある。特に更年期の場合は、自分も周囲も更年期の女性が抱える身体の不調についての情報が不足しており、身体の不調を理解されないことも少なくない。それゆえ、「更年期」もまた妊娠・出産・育児・介護と同様、ケアやサポートの必要とする時期であることの理解を促すための施策が必要である。具体的にはセミナーの開催やポスターキャンペーン等も有効だろう。

【3】「教育・研究・業務・職場環境」から見た女性研究者支援

教育・研究・業務・職場環境においても、キャリアステージやライフステージに関わらず、多くの女性研究者から、不安や心配を語る声が挙げられている。教育面では、学生と触れ合うことの楽しさと共に、学生の指導の面で悩んでいる姿が見られた。業務面では、雑用の多さや、なぜその仕事をしなくてはならないかを悩む声、研究面では、業績作りへの切迫感や外部研究費が確保できるかどうかの不安を抱えている女性研究者が多かった。

これらの悩みや不安の多くは、各々の研究者が、研究においても仕事においても孤立しており、情報交換を行う機会が少ないことに起因しているのではないだろうか。すなわち、これらの問題の多くは、先輩研究者や同僚と情報交換を行うことで、解決の糸口が得られ、不安の軽減につながるものと思われる。例えば、学生指導の面で悩みがある場合には、ベテラン研究者からアドバイスを得る、業務面や研究面での不安についても、話を聞いてもらうことで、その問題の原因を客観視することに繋がるものと考えられる。

このような問題の多くは、相談することによって解決に結び付くことが多いものの、同じ部局の同僚等の仕事の利害関係者の場合、相談をもちかけることすらできない。男女共同参画推進室で提供しているメンタリングの制度は、こうした相談相手を見つける上ではとても有効な手段だと考えられる。それゆえ、メンタリング制度があることを積極的に広報していくと共に、メンターに幅を広げていく必要がある。更に、個人的に相談のできる相手を見つけるための仕組み作りとして、ランチミーティングへの参加を促すキャンペーンなども有効な方策である。

外部資金確保の不安や教育面での不安を払拭するための事業としては、女性研究者に特化した外部研究資金獲得セミナーの開催や、教育力アップに特化した情報交換会の開催なども有効な手段として考えられる。

【4】「女性研究者が抱く研究の魅力・やりがい・楽しさ」から見た支援

「巡回聞き取り相談」で得られた語りの中には、様々な不安や困難を抱えながらも、多くの女性研究者が研究や仕事に「魅力・やりがい・楽しさ」を感じている言説が多く見られる。すなわち、研究や仕事に誇りを感じ、より良い研究を行うために前向きに努力をしている女性研究者の姿が浮かび上がってくる。女性研究者にとって、「趣味と仕事の境目はなく」、「ずっと仕事をするのは当たり前」の事柄であり、ワークとライフは分けて考えられるものではない。本学における女性研究者の支援策は、ワークもライフも両方をバランスよく支援することであり、こうした女性研究者の特徴を踏まえた上で、各種支援策を提示する必要があると今後求められるだろう。

【5】「男女共同参画推進事業と女性研究者を支える各種支援体制のニーズ」から見た支援

これまでに本学では様々な男女共同参画推進事業を行ってきたが、JSTによる補助事業が「女性研究者支援」であったため、事業の多くが女性研究者支援に偏っていたことは言うまでもない。それゆえ、女性研究者の語りの中には、「男性を巻き込んだ事業の必要性」や「管理職に女性が登用されることを望む声」、「職場環境を変えるためにも女性教員増を望む声」が挙げられている。

今後、男女共同参画推進事業としての定着を図っていくならば、女性のみならず男性等をも巻き込んだ事業展開を益々図って行く必要があるだろう。管理職を対象としたセミナーなど、男性の教職員を男女共同参画推進に取り込むことを意識した施策の益々の展開に加え、今後は女性の管理職への登用を各部局に働きかけると共に、こうした女性たちがロールモデルとなり、上を目指す女性たちが増えるよう働きかけていくことが求められている。

実施中の「研究継続支援員制度」「巡回聞き取り相談制度」「メンター制度」「託児サポーター制度」についても、概ね良い評価が得られているものの、更に使い勝手の良い制度となるよう改善していくことが望まれる。特に、本報告書のベースとなっている「巡回聞き取り相談制度」については、これまで、実施回数や時期の点で、全学の女性研究者に一律に行ってきた。しかし、今後は各研究者のニーズに合わせて、回数や時期にメリハリをつけることで、本事業の更なる効果が認められるだろう。例えば、新任の研究者へは着任後の早い時期に実施したり、不安や悩みを多く抱える研究者へは年に複数回実施する等である。また、女性研究者のみに限定せず、巡回相談事業の効果が期

待できる場合には、男性研究者への「巡回聞き取り相談」を実施することも検討する必要がある。

その他、多くの女性研究者から、各種の支援事業の要望が寄せられている。特に要望が高かったのが、学童保育、病児保育、学会出張時の保育支援、子育て中の講義の支援である。こうした支援の要望にきめ細かく応えることができるよう、引き続き学内のニーズを把握しながら、できる事柄から各種支援策を整備して行きたい。

巡回聞き取り相談によって、様々な女性研究者が抱える問題点や女性研究者を支える上でのニーズを把握することができた。今後も丁寧に本学の教職員のニーズを把握しながら、そのニーズに適した支援策を提供する方向で男女共同参画推進事業を展開していく必要性が求められている。

IV. 巡回相談を振り返って

◎work◎life◎
balance innovation

3年間継続して巡回相談を行ってみて、研究者をめぐる状況はどんどん変わっていくことがわかった。初年度、困難を抱えていた方が、翌年、翌々年には問題を解決し、前進されていることも多かった。不満を述べていた人がステップアップし自己実現していて驚かされることもあった。また新たな問題が発生し、苦慮されている場合もたくさんあった。また、ライフイベントという側面では、出産し、子育て期に入った方、介護が始まった方、介護を終えた方などがあり、1回の巡回で終わるのでなく、複数回、訪問することによって、状況の変化、障壁の克服や工夫、女性のライフサイクルを追うことができた。

継続して巡回相談に応じた方々からは、話すことで気分転換になった、日頃時間をとれなかったことを考え、整理する機会になったという声が複数あり、巡回相談に対してよい印象を持っていた。どちらかという、新任の方や比較的若い方の感想に多かった。研究に対するモチベーションの再確認の機会になったようだった。

また、勤続年数の長い研究者は、ある程度は困難を乗り越えてきたか、あるいは人に少し話したくらいでは対処できないような多重の課題を抱え、大学運営に関しても教育研究に関しても、責任が重くなり多忙な状況にあるようだ。介護と更年期症状などによる健康問題が重なっていることも多く、さらなる支援の形を考えることが課題である。

また困難を意識していなかった場合でも、聞き取りによって振り返り、あの時こうやって乗り越えたのだ、と気づいていかれることもあった。

以下では巡回相談を振り返って、女性研究者を支援していくための方向性を提言する。

1. 巡回相談を継続する

1) 対象者を広げる

女性研究者の中で、継続して巡回を希望したのは、新任、若手、子育て中の方が多かった。しかし大学院生のサポートも必要と感じられた。医学部の院生は多忙であることによって、また理系の院生は女性の割合が非常に低いことによって、孤立する場合があった。また留学生も孤立しがちだった。また、長時間労働によりワークライフバランスを崩す可能性は、女性研究者に限らず、男性研究者・研修医・事務職員も同じく抱えていると思われた。対象者を様々な立場や職種の人に広げると、大学の全体的な状況が見えるのではないだろうか。またそれによって、それぞれの支援に必要な背景をもつかめるのではないかと考えられる。

さらに、女性研究者で巡回相談に応じなかった方々のほうがより多忙であると考えられ、ワークライフバランスが崩れている心配がある。

2) 相談業務の意義の明確化

巡回聞き取り相談の中プライバシーを保守しながらも、聞きとった内容から今後の大学の施策に活かしていくことを表明し、巡回相談の意義を明確にしておく必要がある。

3) 通年での事業展開とアポイントメントの工夫

大学では学部や職種によって大変多忙な時期があるので、巡回相談は通年で行う必要がある。今回は多忙な時期に巡回があたり、アポイントが全く入らない学部も生じてしまった。そのような状況を避けるためにも、たとえば年度初めにおおよその都合をメールなどで伺い、その返信を待って、都合の良い時期に再度スケジュールを打診するとよい。

2. 生活情報・支援情報・交流の機会を増やす

1) 山形での生活情報の不足

雪国でない地域から山形大学に赴任した方にとって、気候風土や食、方言などの文化を知り、慣れるまでの困難が見られた。たとえば冬に長靴が必要で、どんな長靴をどこで購入したら良いか、暖房器具は何を買ったらいいか、水道の凍結、冬の通勤の問題や、寒冷地仕様の乗用車について、体調を崩した時どこの病院に行ったらよいか、栄養の整った惣菜が買えるお店など、話してみると、実は誰かに聞いてみたかったという情報は多岐にわたった。何気ない雑談や周りの人に聞けばわかるように思われることも、個別に研究生活に入っているので、地元での生活情報が得られず、生活のしにくさを抱え、健康に響くようなケースも中にはあった。その地域に住んでいる人に聞かなければわからないことがたくさんあり、そのようなことを話す機会が不足しているケースがあった。

2) 女性研究者の交流の機会を増やす

女性研究者にとって、着任の頃に情報交換をする場や人の存在が大学での生活環境を支えるポイントである。赴任間もない時は誰に聞いたら良いのか分からず、困っている人もいるようだ。女性研究者が少ない学部では教員、院生とも孤立しがちになる傾向があった。多数の男性の中では話しかけられず雑談の機会が少ないので、周囲の理解を得たいことがあっても、なかなか状況を伝える機会がないという場合もあった。

また、大学院生は、入学が4月と限らず、年に数回入学の機会があるため、学部生と違い、院生同士の交流の機会が得られない。すぐにそれぞれの研究分野に所属していくため、女性同士が入学時に見かけた以降会うことがなく、あのとき知り合っておけば良かった、という声もあった。院生同士の交流できる場が求められる。現在、毎月行われている女性研究者交流会(ランチミーティング)などを学部単位で開催する、あるいは、入学時に自己紹介やメールアドレスの交換をする時間をもうけるなどの工夫があるとよいと思う。何らかの困難を感じていない時、早い時期からでも、交流の機会を設けることによって、必要な情報を自然と得られることが期待できる。

3) 支援する人材を確保する

利用者には好評だった研究継続支援員制度だが、今年度までの支援員は研究支援に限られていた。専門的な知識や技術をもった補佐員の確保は難しい場合もあるので、今後は事務補佐や教育の補佐をしてもらえると、結果的に研究に力を注げるという声も多かった。

支援員の人材バンクをつくり、ネットワーク作りをしておく、急な支援の要望にも対応できるのではないかと思う。たとえば保育ママなどが人材として確保されていると、急なお子さんの発熱時にも支援を頼むことができ、より働きやすい環境になると考えられる。

4) 効果的に男女共同参画推進事業を広報する

推進室の支援内容や企画のお知らせは、メールやHPでの紹介とともに、ニューズレターを全ての教職員に配布しているが、相談員が直接会って、支援制度の内容や企画を伝えると事業の内容も、理解しやすく、反応も大きいように感じた。特に「育児と介護のためのパンフレット」は全員配布したものの、目をとめてない人もあり、相談員が口頭で伝えると、興味を示すこともあった。研究継続支援員についても、『そんな良い制度があることをもっと早く知りたかった』という人もいた。また「育児と研究の両立を」なんとかやっていけそう、と言われた人もいた。よって今後は巡回相談を、推進室の内容や活動を積極的に周知する機会としても生かしていきたい。

3. 大学全体で働きやすい環境を整える

1) 環境づくり

聞き取りでは、子育てや介護を「リスク」ととらえる人が多かった。子育てや介護は研究を中断するものであり、中断すると戻れないという。大学全体で、子供を産み育てるのはプラスであり、介護は研究者にとって幅を広げるプラスになるという流れにはならないだろうか。子育てや介護経験が教育、研究の幅を広げる可能性について多くの人が気づく必要がある。

女性研究者の中では「子育て」は比較的话题になりやすいが、男性職員同士が子育てや介護を話題にすることは少ない様子である。男性・女性に限らずどんな状況で生活しているのかが伝わっていると、いざというときに助けられることもあるようだ。まず子育てや介護を話題にしやすいような職場環境を整えていくことで、全体の意識を変えることになるのではないだろうか。そうして大学全体で子育てや介護を「リスク」ではなく「プラス」と感じられる環境が整られていくと良いだろう。

2) タイムマネジメント講座などの開催

聞き取りを行うと、多忙で研究がぜんぜん進まないという人もいたが、すきま時間も利用して進めている人もいた。どうやって身につけたのか聞いてみると、タイムマネジメントについての本を読んだり、勉強したり、あるいは時間の使い方が上手な方と一緒に学会に参加して、時間の使い方を見学したりしていた。分野によって時間管理の方法は様々だが、仕事の緩急を学ぶことでワークライフバランスを保つ助けになるよう、時間の管理術を学ぶ機会を用意すると良いと考えられる。

<資 料>

資料1 巡回聞き取り相談事業への協力依頼

女性研究者の皆様

山形大学男女共同参画推進室長
理事 北野通世

女性研究者等への巡回聞き取り相談へのご協力をお願い（依頼）

本学では、本年度文部科学省科学技術振興調整費が採択され、「山形ワークライフバランス・イノベーション」をテーマに、全学をあげて、仕事と育児等の両立を可能にする職場づくりを推進することとしております。

これを受け、男女共同参画推進室では、このたび「巡回聞き取り相談事業」を行うことになりました。この事業は、男女共同参画推進室の教員と非常勤相談員が一緒になって、各キャンパスを巡回して聞き取り相談を行い、女性研究者等（教員と博士課程の大学院生が対象）の研究や生活の現状を把握するとともに、キャリア支援等をメインとして、ライフバランスの取れた研究・生活を送る上で、どのような課題や障壁があるのかを汲み上げるものです。

巡回相談業務を通じて、女性研究者等が抱える問題を共有し、本学の取り組むべき課題について男女共同参画推進室が中心となって解決策を探ることを目指しております。

つきましては、女性研究者の皆様のご希望とご都合をお聞きし、来月から順次、訪問相談を開始することを予定しております。訪問する時期や聞き取りした内容につきましては、個人情報に絶対に漏れないよう、十分配慮して行うこととしておりますので、本事業について格段のご理解とご支援をいただきたいと存じます。

お忙しいところ恐縮に存じますが、別添の日程伺い表にご記入の上、直接、男女共同参画推進室へ 〇月〇日までに、ファックス、メール、学内便等にて送付していただきたく、お願い申し上げます。

記

1 女性研究者等への巡回聞き取り相談日程（○学部）：

- ①日程伺い表の配付 平成 21 年〇月〇日～〇月〇日
- ②男女共同参画推進室への送付期限 平成 21 年〇月〇日
- ③聞き取り相談日程 平成 21 年、〇月〇日～〇月〇日

2 巡回聞き取り相談事業の内容：別紙のとおり

3 聞き取り相談対象者：全女性研究者（教員、博士課程の大学院生）

資料2 巡回聞き取り相談事業についての説明資料

「女性研究者等への巡回聞き取り相談」について

【目的】

本事業は、各キャンパスを巡回し、女性研究者（教員＋博士課程の院生）の研究と生活の現状を把握するとともに、ライフバランスの取れた研究・生活を送る上で、どのような問題や障壁があるのかを汲み上げ、大学の取り組むべき課題として、男女共同参画推進室を中心に解決方策を探る。

【相談の範囲】

- ・ 研究・キャリア面での相談、育児・介護相談、健康、将来への不安、どこにも相談できなかった不安等、「何でも、よろず相談」。

【相談方法】

- ・ 面接型

【相談を受けた事柄の行方】

- ・ 関係部署へ繋ぐ
- ・ 関係する情報の提供
- ・ 「男女共同参画推進室」として、各学部や担当部署に願います 等々。
- ・ 「学長・学部長と女性研究者との懇談会」等で、議論する。

【プライバシー保護、個人情報保護】

相談された内容は、男女共同参画推進のための基礎資料として使用することを許可していただくものの、内容等が公表される際には、絶対に個人が特定されないように情報管理を徹底する。

【巡回相談の手順】

- ・ 巡回聞き取り相談の日程伺い表を、各部局にお送りし、メール、ファックス、学内便にて、男女共同参画推進室宛に返送してもらう。
- ・ ご本人様と直接やりとりをし、アポイントメントを取る。
- ・ 男女共同参画推進室教員、非常勤相談員が、指定の場所へ赴き、小1時間程度、相談を行う。
- ・ 相談と共に、女性研究者のネットワークを構築している件、本学が男女共同参画、特に女性研究者の支援事業を行っている等のご案内をする。

資料3 日程伺い表

女性研究者等への巡回聞き取り相談・日程伺い表

ご所属 []

お名前 []

ご連絡先の電話番号 []

メールアドレス []

<○をお付けください>

- ・ 男女共同参画推進室からの連絡方法については、(メール 、 電話) を希望する。
- ・ 聞き取り相談の場所については、(研究室、 研究室以外の場所) を希望する。
- ・ 山大男女共同参画メールマガジン*¹の受け取りを (希望する、 希望しない)。
- ・ 山大女性研究者メーリングリスト*²への登録を (希望する、 希望しない)。

* 1 山大男女共同参画メールマガジンとは、毎月1回程度、男女共同参画推進室から発信する情報マガジンのことです。

* 2 山大女性研究者メーリングリストとは、女性研究者限定のメーリングリストで、皆様がお持ちの情報や意見を自由に投稿して、意見交換をしていただく、Web上の女性研究者ネットワークを意味します。

<ご都合の悪い日に×をお付け下さい>

	○/○(月)	○/○(火)	○/○(水)	○/○(木)	○/○(金)
午前					
午後					

<巡回聞き取り相談員へのご意見・ご要望をご自由にお書き下さい>

資料 4

インタビューガイド

【始める前に】

①挨拶の準備

調査の目的を説明し、個人のプライバシーに配慮することを約束する。

相談者の不安を軽減して、信頼して話してもらえるような雰囲気づくりをめざす。

②オープンエンド形式の質問を行う。

＜注意＞アンケート調査で得られるような「はい、いいえ」式のデータを得るための調査ではありません。ご自身の言葉で語っていただけるよう、「はい、いいえ」で答えてしまう質問は、なるべく避けよう！

【質問のタイプ】 (Patton,1990,pp.290-293)。

①経験・行動を聞く質問：答えやすい

②意見・価値観を問う質問：やや答えにくい

③感じ方を問う質問：答えにくい

④知識を問う質問：答えやすいが、誤解が生じやすい

⑤見たり聞いた経験を聞く質問：答えやすい

⑥フェイスシートを埋めるための質問：最初？中間？最後？

【質問のコツ】

①答えやすいように、質問の順番を工夫する：いきなり「意見」を尋ねるのではなく、まずは、「男女共同参画推進室のイベントや支援事業を利用したことがありますか？」など、「経験・行動」を問う質問をし、相手が答えやすい順番で質問をする。フェイスシートの内容を質問の合間に挟むなどの工夫をして、話の流れを相手に委ねる。また、現在→過去→未来の順に答えやすい

②質問は簡潔に尋ねる。複雑な仮定形を用いた質問などは避ける。

③ワーディング(wording)への注意：あいまいな言葉を使わないようにする。相手から出てきた言葉については、それがどのような状況で発せられた言葉かをメモに残す。

④「なぜ」という質問(Why questions)をなるべくしない。

⑤例えばを使った形式の質問(preposition questions)を活用する。たとえば「ワークライフバランスをとるのにどのように努力していますか？」という質問は、ワークライフバランスは、個々人の努力が前提にあるということを前提にしている。

⑥「促しの言葉」(probes)をかけることも効果的。相手が答えに困ったり、どう答えていいのかわからずにいたときには、答えやすいように質問に説明を加える。

⑦事例を話すことも ok(illustrative examples format)。例：「女性研究者は、特に家庭での役割も多く、研究との両立に困難を抱えていると言われていますが・・・」

【インタビューの項目】

＜仕事について＞

- ・あなたが働いている職場について教えてください。
- ・そこに来られて何年になりますか。（フェイスシート部分）
- ・あなたの「仕事と生活のバランス」は、取れていますか
- ・あなたの現在のお仕事は、業務（学科の事務等）・研究・教育の割合はどのくらいですか

- ・あなたは、今のお仕事に満足していますか。
- ・お仕事をする上で、あなたが働きがいを感じたときの経験をお話ください。
- ・満足していないとしたら、それは、どのような事についてですか。
- ・それを解消するために、どのように対処してきましたか。問題を解消するコツのようなものがあれば、それを教えてください。
- ・あなたは、今の職場の環境に満足していますか。
- ・満足していないとしたら、それは、どのような部分についてですか。
- ・どのようなサポートがあれば、もっと良い仕事ができると思いますか。
- ・そのサポートをするのは、誰がすべきだと思いますか。

＜生活について＞

あなたの生活環境についても、お尋ねします。差し障りのない程度で、教えてください。

- ・同居者はいらっしゃいますか。
- ・あなたの家庭での役割について、教えてください。
- ・仕事とその役割をする上で、どのようなことに困難を感じていらっしゃいますか。
- ・仕事とその役割を両立するために（その困難を克服するために）、どのような工夫をいらっしゃいますか。
- ・どのようなサポートがあれば、両立をしやすいと思いますか。

- ・最後に年齢を教えてください。

資料 5

女性研究者各位

巡回聞き取り相談事業について

男女共同参画推進室では、昨年に引き続き、本年度も「女性研究者等への巡回聞き取り相談事業」を行うことになりました。つきましては、下記をお読みになり、巡回相談担当者が皆様のところに訪問する際には、是非ご理解の上、本事業へのご協力をお願いいたします。

巡回聞き取り相談事業の目的：

本事業は、女性研究者等（教員と博士課程の大学院生）を対象に、女性研究者が研究や生活を送る上で、どのような課題や障壁があるのか、そして、これまでの男女共同参画推進室の取り組みは、どのような効果をもたらしているのか等について、研究・分析するものです。そして、女性研究者の抱える問題を共有し、男女共同参画推進室の事業を効果的なものにするための具体的施策を探ることを目的としています。

聞き取りの方法

本研究の目的を達成するための方法として、本学に所属する女性研究者のみなさんとの個別聞き取り調査を計画しています。聞き取り調査は約 30 分～1 時間程度を予定しており、皆様にお尋ねする項目は、「研究と生活の両立」をする上で、どのような課題や障壁があり、それをどのように乗り越えつつキャリアを形成してきたのかを、ご自身の体験をもとにお話しいただくと共に、ワークライフバランスを支えるための支援等についてのご意見をいただくものです。

聞き取り調査は、男女共同参画推進室の教員と非常勤相談員が行い、聞き取った内容をメモとして記録致しますが、その内容については、データが漏洩しないよう、男女共同参画推進室が責任をもって厳重に管理して取り組むこととお約束いたします。

協力の任意性

聞き取り相談へのご協力の同意は、女性研究者各位の自由な意思でお決めいただくものです。ご同意いただけなくても、決してあなたの不利益になるようなことはありません。ご同意いただいた後でも、あなたが希望されればいつでも同意を取り消すことができます。また、調査参加者は、すべての質問に対して答えなければならないというものではありません。お答えになりたくないものに対しては「答えない」とおっしゃって下さい。

個人情報の保護

聞き取り調査で得られた個人情報は、男女共同参画推進室の教員と相談員以外に共有されることはありません。聞き取り調査の内容を記述したファイルは、厳重に管理し、学会や学術雑誌において研究結果を公表する際には、個人情報の守秘に細心の注意を払い、名前や所属などの個人が特定されることは、一切公表しません。

本件に関してのご質問がありましたら、遠慮なくお尋ねください。十分に説明させていただきます。以上のことをご理解いただき、是非、巡回聞き取り相談事業にご協力下さいますようお願い申し上げます。

山形大学男女共同参画推進室 幅崎、村山、菅生、會田

連絡先：内線 4938

habazaki@jm.kj.yamagata-u.ac.jp, junkai@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

あとかき

本報告書は平成21年度、22年度、23年度の3年間に渡って、巡回相談員と教員が一体となって実施してきた「巡回聞き取り相談」調査の調査結果をまとめたものです。本調査を実施するに当たっては、山形大学の女性研究者の皆様の協力無しには遂行することができなかったことは言うまでもありません。多忙な中、ご協力を頂いた女性研究者の皆様には、ここに深謝の意を表します。また、多くの先生方から、被調査者として貴重なご体験を語っていただくと共に、巡回聞き取り相談調査の細部にわたり、ご指導とご助言をいただきました。感謝申し上げます。

3年間に渡る調査を通じて、ワークライフバランスの取れた生活を送っていく上で直面する問題、研究者にとってのやりがい、女性研究者を支える支援体制の課題など、本学の女性研究者の現状を明らかにし、男女共同参画推進事業に活かしてきました。そして本調査を通して、巡回型の相談事業へのニーズがあることがわかってきました。

3年間の相談事業を通して「巡回聞き取り相談」事業の目的の1つである「調査」は、一つの役割を終え、今後、「巡回聞き取り相談」事業は「相談としての役割を強化し、個々の研究者の抱える心配や問題を1つずつ解決していくことに取り組むべき時期にきています。

男女共同参画推進室では、引き続き、山形大学の全職員のワークライフバランスの向上に資するよう、今後も「巡回聞き取り相談」事業を実施していきます。本事業への益々のご理解とご協力をお願いすると共に、この調査報告書が、広く大学全体が女性研究者の置かれた状況を理解することに資するとともに、本学の男女共同参画の益々の推進に繋がることを願っています。

山形ワークライフバランス・イノベーション

第1部－2 平成21年～23年度 巡回聞き取り相談調査結果報告書

2012年3月発行

発行 山形大学男女共同参画推進室

連絡先 〒990-8560 山形市小白川町1丁目4-12

Tel 023-628-4937,4938,4939 Fax 023-628-4014

URL <http://www.yamagata-u.ac.jp/kenkyu/danjo/>

E-mail danjo@jm.kj.yamagata-u.ac.jp